

『メモア』と『理科会粹』

磯野直秀

一 はじめに

明治十年（一八七七）に創立された東京大学は、二年後の明治十二年から、“Memoirs of the Science Department, University of Tokio, Japan”（以下『メモア』と略）とその邦訳版『理科会粹』の二種類の紀要を刊行しはじめた。前者は誌名を幾度か変更しながら明治十八年までに一六冊、後者は明治十六年までに七冊がそれぞれ出版されて終わる。

両誌ともこのように短命ではあったが、本邦における大学紀要の嚆矢¹⁾であった。しかし、その事実は広く認識されているとはいえず、また両誌の全容も知られていないようである。『東京大学百年史』も、東京大学が明治十年代に刊行した『学芸志林』は詳しく取り上げているのに、『メモア』と『理科会粹』は単行本扱いで何点かを表に記載するに留まり、全体像には触れていない²⁾。同じく『百年史』の理学部編も両誌を無視している。また、『學術雑誌総合目録』『欧文編』

の『メモア』の記載は不完全であるし、『理科会粹』にいたっては、同「和文編」から完全に脱落している。

一〇年ほど前から日本の動物学史を調べはじめた私が最初に取り組んだ課題の一つは、アメリカ人御雇い教師で東大理学部動物学教室の初代教授モース (E. S. Morse) の事跡だったが、紀要の刊行はそのモースが当局に発刊を進言したと伝えられている。事実その創刊号は、彼の大森貝塚発掘報告書、“Shell mounds of Ohori”であり、『理科会粹』もその邦訳版『大森介墟古物編』に始まる。そのような関連から両紀要の発刊から終刊までを調べ、一応の概要はすでに発表した³⁾が、本報ではその後判明した事実も含めて報告する。

二 両紀要の発刊

明治十年六月十七日、腕足類の研究を目的としてモースは横浜に上陸した。同十九日、彼は便宜を計ってもらうため、当時文部学監

だった同国人マレー (D. Murray) に会いに上京したが、このとき思いがけず東京大学から招聘を受ける。大森貝塚の発見はこの上京の折だったが、実際に初めて発掘したのは九月十六日であった。その数日後にマレーも伴って二度目の発掘を行ない、同二十一日には早くも第一報を『Nature』に送っているが、その末尾に「東大当局が発掘を全面的に支援してくれる」旨を記しており、来日後三ヶ月ですでに、モースが首脳陣の深い信頼を得ていることがわかる。

彼はその二十一日前後にしたためた日記で大森貝塚発掘に触れてこう記した——「大学当局は、私がこの件について書く報文を何にせよ出版し、海外のさまざまな学会に送付すると約束している。こうして一連の科学論文の刊行を始め、それを諸研究機関へ交換用に送って科学図書館を作りたいものだ」と。

『東京大学法理文三学部第六年報』(明治十年九月至同十一年八月)所収の報告書「モールズ申報」には、上記のことが大森貝塚発掘品に関連して明文化されている。

……余ハ不日、本品ノ解説書ヲ進呈セント欲スレバ、閣下速ニ之ヲ印行シテ、其若干ヲ前述米國諸会社(学会)等ノ報酬ニ充テントコトヲ希望ス。而シテ以後、年々此印行ノ挙ヲ継続スルニ関シ、其費用ヲ務メテ節減……陸続刊行シ、以テ之ヲ海外ノ交換ニ充ルヲ得バ、之ニ由テ管ニ広ク海外ノ奇品ヲ収ムルヲ得ルノミナラス、本邦ノ自ラ其発見ヲ弘ムルノ益ヲ得ルヤ、決シテ淺少ニ非ザルナリ。

この申報には、上記引用文の後に北海道・東北への採集旅行の希望が述べられているが、それが実現して東京を離れたのは明治十一

年七月十三日であった。そのほかの内容も考慮すると、この申報を記したのは同年五月か六月と思われる。

モースが紀要発行を進言したとされる根拠はこの申報だが、もちろん東大当局が独自に紀要創刊を構想していたかもしれない。しかし、そうであったとしても、モースの提言が紀要発刊を促進したことは間違いないであろう。

いずれにしても、このような経緯を経て明治十二年(一八七九)に、『メモア』第一巻第一部として、モースの『Shell mounds of Omori』が刊行された。大きさは横一九・五×縦二八・〇センチ、表紙は青灰色。中扉(図2左上)とまったく同じ字句が印刷されており、同一の組版を用いたと思われる。発行元は、単に Published by the University となっており、後述の『理科会粹』が「東京大学法理文学部印行」と記しているのと異なる。

構成は、冒頭に大森貝塚発掘作業を描いた石版画一枚、ついで中扉、序文二頁、目次一頁、本文三六頁、図版一八枚の順である。本文の最初にある内題は、表紙の題とちよ違つて、『The shell mounds of Omori, Japan』となっている。図版には英和両文が印刷されているが、これは図版を邦文版にもそのまま使ったためであった。

この『メモア』創刊号の発行は明治十二年九月初めらしい。このころは、横浜で発行されていた英字週刊新聞『The Japan Weekly Mail』の九月六日号に、『Professor Mores's Shell Mounds of Omori』というタイトルの記事があり、その冒頭で

The first volume of the Memoirs of the Science Department of the

University of Tokio has just been issued, containing the results of Professor Morse's investigations in connection with the shell mounds near Omori.

と、『メモア』の創刊を伝えているからである。これに続き、論文の内容がじつに二頁にわたって詳細に解説されている。別の週刊紙『The Tokio Times』の同日にも『The Omori Shell Heap』の見出しで一頁を割いて、大同小異の紹介を行なった。

『メモア』の発刊がこれだけ大きく取り上げられたのは、大森貝塚の発掘が注目の的だったからでもあるが、いま一つには著者モースが九月三日に横浜を離れて帰米の途についていたからであった。もちろん両紙とも、モースの帰国にも筆を割いて名残を惜しんでいる。

帰国の日付と週刊新聞という点を考慮すると、『Shell mounds of Omori』が刷り上がったのは、モースが東京を離れる直前、八月末日から九月二日までのあいだと考えてよいであろう。

先の引用文にあるように、紀要を学術雑誌などとの交換に充てることをモースは構想していたが、実際に彼は『メモア』第一号をアメリカに持ち帰り、学術的刊行物や諸資料との交換をはかった。図1は、その寄贈の際に添えた手紙で、当時の東大法理文学部総理加藤弘之の名があることからわかるように、正式に東大の依頼を受けたものであった。なお、文中に「東京大学は考古学博物館ならびに図書館を設立中なので」云々とあるのは、これもモースが東大に設立を進言し、彼の帰国後まもなく完成した「東京大学博物館」を指すのであろう。もっとも「博物場」は、考古学に限らず、自然科学

全般や工学関係の資料も収納・展示する施設であった。¹⁵⁾

一方、『理科会粹』の発行は、いつ誰が提案したのだろうか。残念ながら、それに関する資料はいまのところ見当たらない。しかし、発案者が誰にせよ、外国人教授たちが日本で行なった研究の成果を、欧文だけでなく一般の人々にも読める形で提供するという方針は、今日でも見習いたい優れた発想であった。

『Shell mounds of Omori』の序文は明治十二年七月十六日に記されたものだが、そこに「日本語版が発行されるため、図版には日本語も併記してある」の一文がある。したがって、遅くともこのと

The University of Tokio, Japan, has the honor to send to your address a Memoir on the Shell Mounds of Omori.

As the University is forming an Archaeological Museum and Library, it would gratefully receive books, pamphlets, specimens, or casts, relating to this subject. Books and specimens may be sent to

*EDWARD S. MORSE,
Salem, Massachusetts, U. S. A.*

And from time to time these will be forwarded to the University of Tokio.

Acknowledgments will be made by Mr. Morse on receipt of the objects, and a final acknowledgment will be made by

*H KATO, Director of the
University of Tokio, Japan.*

Salem, Mass., Nov. 20, 1879.

図1 モースが送った文献交換の依頼状(セララム・ビーボディ博物館蔵)

きまでに『理科会粹』刊行の方針が確定していた。

ついで明治十二年九月十日、『Shell mounds of Omori』とベルソンの『高等物理学』について、『学術上之裨益ト可相成モノユヘ、今般両書トモ翻訳ニ着手イタシ、訳成之上ハ出版候様致度、此段相伺候也』との同書が加藤法理文学部総理から田中不二麿文部大輔宛に出され、九月十五日付で承認された。この承認を受けてであろう、東大は『郵便報知新聞』明治十二年十月六日号に広告を出した。

次二記載セル書籍ハ、本部ニ於テ既ニ翻訳ニ着手セリ。此旨、広告ス。

明治十二年十月三日 東京大学法理文学部

理学部教授ヘルソン氏著

一 高等物理学

Physique superieure.

同 モールス氏著

一 大森介墟篇

Shell Mounds of Omori.

法学部教授テリー氏著

一 法律原論

First Principles of Law.

年が明けて明治十三年一月二十一日、『郵便報知新聞』は「東京大学法理文学部印行理科会粹第一帙の上冊、大森介墟古物編（米人モールス氏撰著）一本……発兌相成たり」と報じ、『東京日日新聞』も一月二十三日付で「東京大学法理文学部印行の理科会粹第一帙上冊、大森介墟古物編は発兌なりて、一本を弊社に贈らる」と伝えた。

こうして発行された『大森介墟古物編』は英文版とまったく同じ

大きさであり、表紙は灰色。図3（左上）でわかるように、右横書で「理科会粹 第一帙上冊」と記すが、「帙」で教える方式はこのシリーズの最後まで続いた。

構成は英文と大同小異で、最初に大森貞塚発掘の石版画一枚、続く中扉には「大森介墟編」とのみ草書体で記されており、つづいて凡例一頁、緒言三頁、目次一頁、本文六七頁、図版一八枚の順である。緒言と目次には「大森介墟編」、本文冒頭には「大森介墟古物編」の題が使われている。訳者はモースの同僚だった矢田部良吉植物学教授で、翻訳は英文紀要に忠実である。凡例の末尾と表紙には「明治十二年十二月」とあるが、前述のように実際に発行されたのは十三年一月らしい。発行部数は、英文版も邦文版も不明。内務省発行の『版權書目』によると、両版とも版權免許を得ているが、市販されたかどうかはわからない。

なお、白い厚表紙の特製本があるが、これは宮家や華族などへの献呈本ではないかという。

三 英文紀要『メモア』

表1は、明治十二から十八年までに発行された『メモア』全一六冊の一覧である。実際の刊行年月は、『文部省出版書目』および『出版書目月報』によって調べた。

図2は、そのうち四冊の中扉だが、各冊ごとに体裁がかなり異なっている。最下部には発行年があるが、まず皇紀を示し、括弧内に西

表1 『メモア』発行一覧

Vol./No.	誌名	著者・論文題名・発行年月
I-Part 1	X	E. S. Morse "Shell mounds of Omori", 1879 (C; 1879年9月)
II	X	C. A. Netto "On mining and mines in Japan", 1879 (C; 1880年3月)
III-Part 1	X	T. C. Mendenhall "Report on the meteology of Tokio for the year 2539 (1879)", (C; 1880年5月)
4	Y	D. Brauns "Geology of the environs of Tokio", 1881 (B; 1881年4月)
5	Y	T. C. Mendenhall "Measurements of the force of gravity at Tokio and on the summit of Fujinoyama", 1881 (B; 1881年4月)
6	Y	R. W. Atkinson "The chemistry of Sake-brewing", 1881 (B; 1881年6月)
7	Y	T. C. Mendenhall "Report on the meteology of Tokio for the year 2540 (1880)", 1881 (B; 1881年6月) 本冊は以下の2編を含む。 W. C. Chaplin "The height of Fujinoyama" Kenjiro Yamagawa "Fires in Tokio"
8	Y	T. C. Mendenhall "The wave-lengths of some of the principal Fraunhofer lines of the solar spectrum", 1881 (B; 1881年6月)
9	Y	J. A. Ewing "Earthquake measurement", 1883 (B; 1883年6月)
10	Q	J. F. Eykman "Phytochemische Notizen ueber einige Japanische Pflanzen", 1883 (B; 1884年1月)
11	Z	J. A. L. Waddell "A system of iron railroad bridges for Japan", 2分冊 (Text Vol.+Plate-Table Vol.), 1885 (A; 1885年6月)
12	Q	Diro Kitao "Leukoscop, seine Anwendung und seine Theorie", 1885 (A; 1885年8月)
I-Part 1 app.	Y	I. Iijima & C. Sasaki "Okadaira shell mound at Hitachi", 1883 (B; 1883年5月) [表紙は1883年、中扉は1882年]
5 app.	Y	A. Tanakadate, R. Fujisawa & S. Tanaka "Measurement of the force of gravity at Sapporo (Yesso)", 1882 (B; 1882年6月)
5 app.	Z	A. Sakai & E. Yamaguchi "Measurement of the force of gravity at Naha (Okinawa) and Kagoshima", 1884 (C; 1884年7月) 本冊は次の1編を含む。 E. Yamaguchi "Observations of magnetic elements"
5 app.	Z	A. Tanakadate "Measurement of the force of gravity and magnetic constants at Ogasawarajima (Bonin Island)", 1885 (C; 1885年3月)

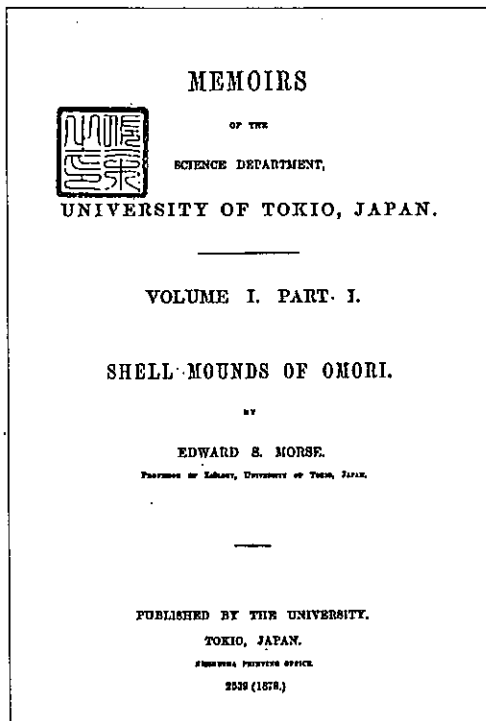
誌名 X: "Memoirs of the Science Department, University of Tokio, Japan"
 Y: "Memoirs of the Science Department, Tokio Daigaku (University of Tokio)"
 Z: "Memoirs of Tokio Daigaku (University of Tokio)"
 Q: "Abhandlungen des Tokio Daigaku (Universität zu Tokio)"
 ただし、XはVol.表示、それ以外はNo.表示。app.=appendix

発行月日: 論文題名の直後の年号は表紙に記載されている発行年。

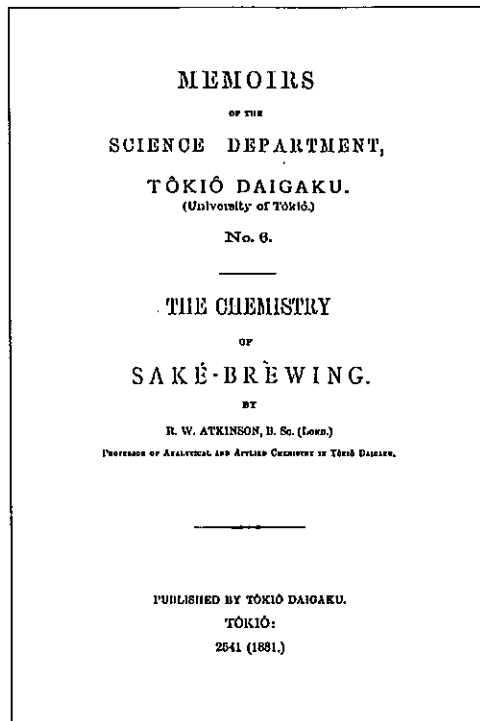
A; 奥付による発行年月。

B; 『文部省出版書目』(1884年)による発行年月。

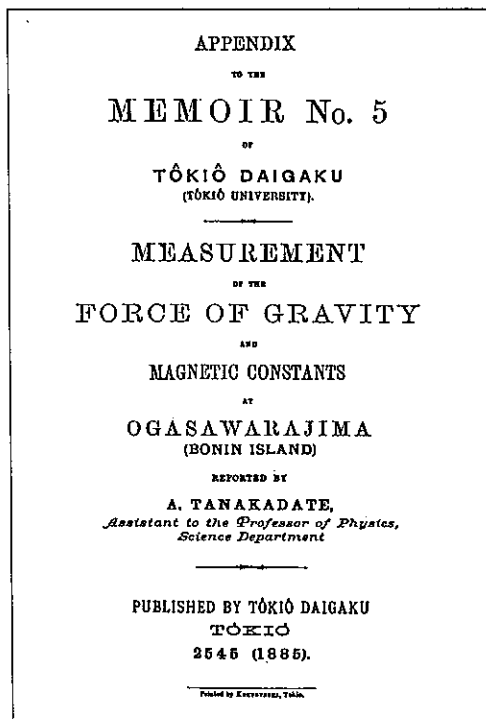
C; 『出版書目月報』による納本年月。



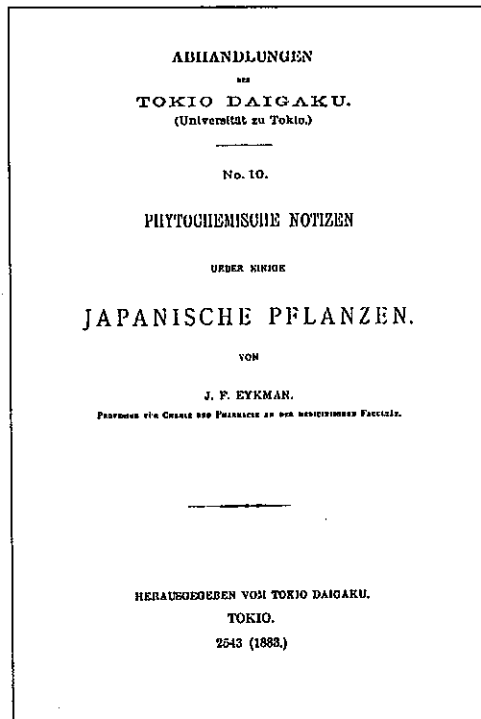
Vol. I -Part I (第1期)



No.6 (第2期)



No.5-Appendix (第3期英文版)



No.10 (第3期独文版)

曆を表示している。

表一からわかるように、この短い期間に誌名が二度も変更されており、次の三期に分けられる。

〔第一期〕明治十二—十三年（一八七九—一八八〇）発行の三冊

誌名は、"Memoirs of the Science Department, University of Tokio, Japan" 及び "Volume" 表示、ローマ数字使用。

〔第二期〕明治十四—十六年（一八八一—一八八三）発行の八冊

誌名は、"Memoirs of the Science Department, Tokio Daigaku (University of Tokio)" 及び "No." 表示、算用数字使用。

大学の英名表記が、University of Tokio から Tokio Daigaku (University of Tokio) に変更されている。モースが明治十年に東

京大学と結んだ契約書⁽¹⁷⁾や、『東京大学法理文三学部一覽 明治十一年—十二年』の英文版では、いずれもTokio Daigaku が用いられているので、これが創立以来の正式の英名表記であり、『メモア』の記載もそれに合せたということであろう。

〔第三期〕明治十七—十八年（一八八四—一八八五）発行の五冊

誌名は、"Memoirs of Tokio Daigaku (University of Tokio)" または "Abhandlungen des Tokio Daigaku (Universität zu Tokio)" 及び "No." 表示、算用数字使用⁽¹⁸⁾。

この誌名改訂は本質的なもので、それまでは理学部の紀要だったものが、誌名から Science Department が消えて、全学共通の紀要に変更されたのである。第一〇号の最終頁にその旨が英独両文で記載されている。

「メモア」と『理科会報』

The plan hitherto followed with the Memoirs of the University has been to issue and number them as Memoirs of some one of the Departments. But hereafter the Memoirs of all the Departments will be issued as "Memoirs of Tokio Daigaku" and numbered as such in order of their publication beginning with number 10. Those of the Science Department heretofore issued will be numbered in the new series as shown below.

Sci. Dept.	Tokio Daigaku
Vol I pt-1	will be No.1
Vol II	" No.2
Vol III pt-1	" No.3
No.4	" No.4
.....
No.9	" No.9

この文を見ると、それ以前から全学部がそれぞれの紀要を刊行する権利を有していたと読めるが、現実には刊行したのは理学部だけで、法学部・文学部・医学部は発行例がなかった。全学共通の紀要となつてからも、理学部以外で論文を出したのは、この号を執筆した医学部のエイクマンただ一人であった。

勤めて考えれば、エイクマンから出版の要請があつて、それまで理学部が独占していた紀要を急遽手直しして、全学誌に格上げしたように取れる。独文誌名の登場も、たまたまドイツ人のエイクマンが執筆者になつたからのように思える。独文表示の号は、この第一〇号のほかは第二二号だけであつた。

結局『メモア』として明治十二年から十八年にかけて刊行されたのは、付録 (Appendix) として出された四冊を含めて計一六冊であった。うち一四冊までが一冊一論文であるが、第七号は三論文、第五号付録のうち一冊は二論文を載せる。ところが、この二冊の表紙には第一論文の題名しか記されていないので、図書カードなどではそれ以外の論文名が脱落していることが多い。

『メモア』の論文数は延べ一九編、うち一二編までが外国人教授計九名によるもので、当時の東大における御雇い教師の重みを如実に示している。その九名は、モース (動物学)、ネッター (採鉱冶金学)、メンデンホール (物理学)、ブラウンス (地質学)、アトキンソン (化学)、チャプリン (土木工学)、ユーイング (機械工学)、エイクマン (薬化学)、ワッデル (土木工学) で、メンデンホールが四編を執筆したほかは、一人一編である。また、医学部のエイクマン以外はすべて理学部所属であった。

一方、日本人による論文は計七編、執筆者は九名である。その七編のうちスタッフによる報文は山川健次郎と北尾次郎 (ともに物理学) による二編だけであり、残る五編は学生の調査・研究の報告であるが、その五編はすべて付録として扱われている。

じつは、モースの後任として明治十二年に動物学教授として赴任したアメリカ人のホイットマン (C. O. Whitman) と東大当局のあいだで、弟子の論文をめぐって次のような悶着があった。

ホイットマン先生は明治十四年七月吾々の卒業を期として大学を去られることとなり、先生は吾々 (若川友太郎と飯島 魁) の卒業論文を校閲してこれ

を大学紀要に載せらるる様に大学へ申請をした。……然るに大学ではホイットマン先生の請求を退け、教授の名義ならば掲載せしめんとのことであつて、多分学生の研究報告は此の紀要に載せない内規であつたらしい。……(先生は) これを聞いて非常に憤慨せられ、斯かる非常識な馬鹿気たることは全世界にもあるまいと罵倒し、然らば外国の學術雜誌に出さうとて余輩二人分の原稿を倫敦へ発送し……⁽²⁾

その論文は支障なく受理されて事は決着したのであるが、ホイットマンは留任の要請を拒み、同年夏に契約が切れると日本を去った。付録という形にせよ学生の論文を掲載するようになったのには、このトラブルが一役買っているかもしれない。

四 邦文紀要『理科会粹』

『理科会粹』は、明治十八年までに七冊発行された。表2はその一覽で、括弧内に翻訳者を、対応する『メモア』の号数を最右欄に示してある。

うち四冊の表紙を図3に示した。紋様化した「大」の字を四隅に配した風格あるデザインは共通しているが、発行年月以外の文字はすべて手彫らしく、「理科会粹」の誌名をはじめ、字体が号ごとに微妙に異なっている。中央に大きく論文題名を入れた点や、号数が「帙」で表示されている点も目を引く。

また、第一帙上冊『大森介墟古物編』、第二帙『日本鉱山編』、第三帙第一冊『東京気象編』と、明治十三年までに発行された三点は

「東京大学法理文学部印行」となっているが、明治十五年以降発行の四点は「東京大学印行」である。この変更の由来を示す資料は見出していないが、明治十四年（一八八一）に東京大学の体制が大きく変わったことが関係しているのかもしれない。それまでは、東京開成学校に起源し当時一ツ橋にあった法理文三学部と、東京医学学校の後身で本郷キャンパスに存在した医学部にそれぞれ別の総理が置かれていて、実質的に別の学校の趣きがあったが、このときから全学ただ一人の総理（字もこのとき変更）のもとに統合された組織体になるなど、大幅に制度が変わったのである。

第二節で記したように、『理科会粹』は『メモア』の邦訳版として企画されたが、実際に七冊のうち六冊までがその翻訳であり、初期に刊行された『メモア』七冊は、第五号を除いて『理科会粹』として出版されている。ところが、明治十四年刊の『メモア』第八号以降は一つも翻訳されていない。明治十六年五月刊行の『メモア』第一巻第一部付録“Okadaira shell mound at Hitachi”、同十六年六月刊行の第九号“Earthquake measurement”などは翻訳されて然るべき内容だが、ついに邦文版は出なかった。明治十四年以降に何らかの方針変更があったのだろうか、その間の事情は不明である。英文紀要の翻訳が中止（？）されたのち、明治十六年（一八八三）十月に、唯一書き下ろしの巨智部忠承撰『概測常北地質編』が、第四帙付録として出版された。そして、これを最後に『理科会粹』は消えたのである。

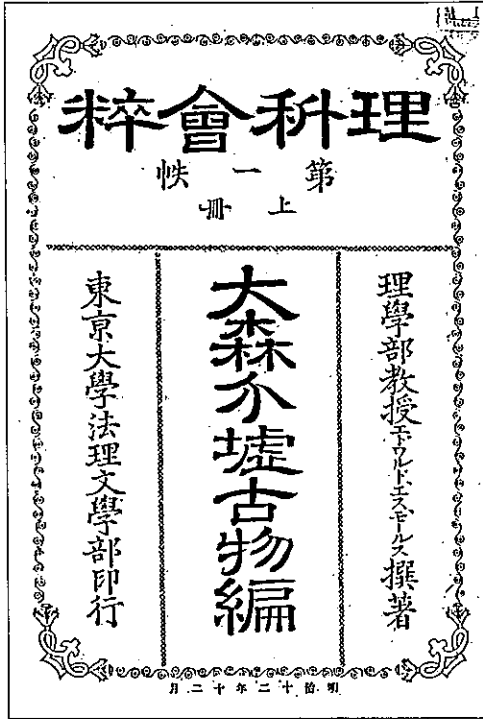
表2 『理科会粹』一覧（年号は明治）

	著者名（訳者名）	論文題名	表紙の発行年月	他文献による発行年月	対応する『メモア』の巻号
第一帙上册	E. S. Morse (矢田部良吉)	大森介墟古物編	12年12月	13年1月*	Vol. I - Part I
第二帙	C. A. Netto (今井 巖・安東清人)	日本 鉦 山 編	13年7月	13年7月**	Vol. II
第三帙第一冊	T. C. Mendenhall (山川健次郎)	東京気象編 (1879)	13年12月	13年12月**	Vol. III - Part I
第三帙第二冊	T. C. Mendenhall (山川健次郎) 〔本冊は次の2編を含む〕 W. S. Chaplin (山川健次郎) 山川健次郎	富士山の高度 東京府下火災録	記載なし	15年9/10月***	No.7
第四帙	D. Brauns (西 松二郎)	東京近傍地質編	15年6月	15年6月**	No.4
第四帙附録	巨智部忠承	概測常北地質編	記載なし	16年10月**	なし
第五帙	R. N. Atkinson (中沢岩太・石藤豊太)	日本 釀 造 編	記載なし	15年6月**	No.6

* 本文参照

** 『文部省出版書目』による。

*** 『出版書目月報』に15年10月納本とあるので、9月か10月の発行と推定。



第一帙上册



第二帙



第四帙



第五帙

図3 『理科會粹』の表紙（上の2冊は「東京大学法理文学部印行」で、職名は「教授」だが、下の2冊は「東京大学印行」で、職名は「教師」となっていることに注意。）

五 おわりに

『メモア』と『理科会粹』が創刊された明治十二年（一八七九）の頃は、英米系の日本アジヤ協会が発行する“The Transaction of the Asiatic Society of Japan”と、ドイツ東亜博物学民族学協会発行の“Mittheilungen der deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens”の両誌が刊行されていて、そこに自然科学や考古学の論文も掲載されていたが、その数は少なかつた。一方、日本人による自然科学系雑誌としては明治十年創刊の『東京数学会社雑誌』と十三年発刊の『東京化学会誌』があるだけで、また当然ながら両者とも国際的に通用する力はなかつた。

したがって、『メモア』と『理科会粹』は、日本初の大学紀要であるだけでなく、本邦最初の本格的自然科学誌として科学史的に重要な意義をもつ。

しかも、その出版は海外からも歓迎された。たとえば、『東京大学第一年報』（起明治十三年九月止同十四年十二月）の「探鉱冶金学教師ネットー申報」⁽²⁾は、「理科会粹」の小見出しを立てて、次のように記している。

比来、海外ヨリ余及他ノ教授ニ書ヲ寄セテ理科会粹ヲ注文スルノ有志、陸續絶エズ。故ニ余ハ前申報ト重複ヲ厭ハズ、切ニ其部数ヲ増加シテ、其一半ヲ公売セラレンコトヲ望ムナリ。此挙ヤ独リ大学及著述者ノ榮譽ノミナラズ、其公衆ヲ裨益スル亦鮮少ニアラス。況ヤ、其售売〔販売〕ノ利ハ多少入費〔経費〕ヲ償フヲヤ。（下略）

ここでいう「理科会粹」は邦文のそれではなく『メモア』を指すが、その発行部数がわずかだったこと、市販されていなかったことがわかるとともに、海外からも需要が多かつたとの記述が興味深い。表1から明らかのように、『メモア』掲載論文の大半は日本の事物を扱ったものである。世界の涯に位置する謎多き国の自然（地震や気象、地質）、産業（醸造や鉱業）、考古学（貝塚や先住民族）などに対して、欧米の科学者たちが深い関心を抱いていたことは疑いない。『メモア』はそれに応えるものだったのである。

しかも、この時期の東京大学理学部教授陣には、優れた人々が欧米から招聘されていたと指摘されている。⁽³⁾したがって、単にテーマが興味あるものだったに留まらず、個々の論文の質もかなり高かつたことが、海外での好評につながったのではないだろうか。

註

- (1) これに先立って東大から発刊された『学芸志林』は、海外文献の翻訳や学外者の寄稿が多い総合雑誌的な性格であって、大学の研究成果の公表を旨とする「紀要」とはいささか異なり、その嚆矢とはいえないと思う。
- (2) 『東京大学百年史』「通史二」、四九一—五〇〇頁。
- (3) この両誌は、大半が一冊一論文のためか、雑誌として認識されずに、図書館の目録では単行本扱いされていることが多い。『学術雑誌総合目録』「欧文編」の『メモア』所蔵校がわずか五校に留まるのはその反映であろう。その記載の不完全な点については、註(18)参照。
- (4) 磯野直秀、「本邦最初の大学紀要」、慶応義塾大学日記紀要・自然科学、二号、四八—五六頁、一九八六年。

- (5) 磯野直秀『モースの日記の目録』六八―七五頁、有隣堂、一九八七年。
- (6) Morse, E. S., "Japan Day by Day," Vol. 1, 287-289, 308-311, Houghton Mifflin Co., 1917. 訳書→石川欣一訳『日本の日々の目録』平凡社東洋文庫、一九七〇―七一年。
- (7) Morse, E. S., "Traces of early man in Japan," Nature, Vol. 17, 89, 1877.
- (8) 前掲註(6)原書、一巻、三二―三三頁。本引用文は磯野の訳である。
- (9) 「動物学教授エドワード・モース氏申報」、『東京大学法理文三学部第六年報』、六四―七七頁。全文の翻刻→守屋 毅編『モースと日本』、小学館、四九五―四九九頁、一九八八年。
- (10) 引用に当たっては、漢字と仮名に現行字体を用い、濁点と句読点を適宜加えた。引用文中の()は、磯野による註である。なお、二行目に「前述米国諸会社等ノ報酬」とあるのは、モースが一時帰国中にアメリカの学会・博物館などから東大に対して大量の書籍・雑誌類の寄贈を受けたことを指し、それらの機関への論文送付を意味している。
- (11) "Volume I-Part I."と記載されているのは、序文の末尾に「第二部には、蝦夷・東京近郊・肥後の貝塚の土器を示す予定である」とあるように統編執筆を意図していたからだだが、その統編の代わりに、弟子の飯島 魁と佐々木忠二郎が発掘した陸平貝塚の報告書が付録として出版された。
- (12) 現代文訳として近藤義郎・佐原 真編訳『大森貝塚 付 関連資料』岩波文庫、一九八三年)がある。
- (13) 前掲註(5)、二五九―二六一頁。磯野直秀、「エドワード・シルヴェスター・モース」、慶応義塾大学日吉論文集・自然科学編、一八号、四八一―四九一頁、一九八四年。
- (14) 『文部省准允 自明治十二年至明治十四年』、『東京大学百年史』、「通史」、四九九―五〇〇頁。
- (15) 内務省、『版權書目』、明治九―一六年(『明治文化資料叢書』七巻(風聞書房、一九六三年)所収)。
- (16) 文部省、『文部省出版書目』、明治十七年(『明治文化資料叢書』七巻(風聞書房、一九六三年)所収)。内務省、『出版書目月報』、明治一〇―二〇年(『明治前期書目集成』(明治文獻、一九七一年)所収)。
- (17) 磯野直秀、「エドワード・S・モースの契約書」、慶応義塾大学日吉紀要・自然科学、一号、六三―六八頁、一九八五年。契約書全文の翻刻→守屋 毅編『モースと日本』、小学館、四九二―四九五頁、一九八八年。
- (18) 『學術雜誌総目録』(欧文編)は「Memoirs of the Science Department, University of Tokio, Japan」の後継誌名として「Abhandlungen des Tokio Daigaku(Universität zu Tokio)」だけを挙げ、「Memoirs of Tokio Daigaku(University of Tokio)」を落としている。
- (19) 表1末尾にある第五号付録の田中館愛橘による小笠原の重力測定論文も、学生が実施したものを助教教授の田中館がまとめたものである。
- (20) 岩川友太郎、「飯島博士を追想して」、動物学雑誌、三四巻、二二―二六頁、一九三二年。
- (21) 『東京大学第一年報』、八〇―八八頁。文中で「前申報」とあるのは、『東京大学法理文学部第八年報』(自明治十二年九月至同十三年八月)の「理学部教授クルト、ネットー申報」(六五―七〇頁)で、「理科会粹第二帙トシテ本部ニテ印行アリタル余ガ著述ノ日本鉦山編……其需要ノ多キ海外ノ知友争テ之ヲ余ニ求ムト雖モ、奈何セン閣下ノ余ニ惠贈スル所、固ヨリ多キモ、既ニ限アルヲ以テ限リナキノ需ニ応ズルヲ得ザリキ……」として、印刷数を増やしてほしい旨のほぼ同じ提案が述べられている。
- (22) たとえば、渡辺正雄、「お雇い米国人科学教師」、講談社、一九七六年。

(いその なおひで 慶応義塾大学教授)